

て、中国医学とは異なる日本の医学書ができてきた。その具  
体例として全体の構成と鍼灸のつぼの記載という問題を取り  
あげて説明されているが、ここでは教授があげている『医心  
方』の特徴を記すにとどめる。

理論不信—経脈説の拒否、陰陽五行説、虚実概念の排除。  
遂には理論的白紙還元につながる。

可視(触)信仰—脈診の排除、脈象は主観的であるがこれを  
排除することは中国医学の否定となる。

単純原則志向—病気の配列、つぼの記載など体の上から下  
へと単純に配列する。

規格化思想—つぼの主治症を記載するに際し原典を省略し  
て一定の枠内に押し込んでいく。

日本の風土への適応—諸薬和名、鍼灸、石薬、房中などに  
多くのスペースをさいている。

これらの根底には撰者の技術的思考が大きく働いているこ  
とを読みとることができる。次いで教授は次の如く結論づけ  
ている。

十八世紀における日本伝統医学の歴史をみると、中国医学  
体系が解体されてその廃虚の上に新しい日本医学がうちたて  
られた。例えば後世派と古方派とを比較しても、前者は無言  
のうちに換骨奪胎したものであり、後者は声高に中国医学の  
解体と否定を叫んだのにすぎない。その結果、五臓六腑説は  
疑われ、脈診は腹診にとつて代えられた。単純原則志向の赴  
くところ、一氣溜滯説、万病一毒説に行きついた。究極的に

は医学大系は医学ハンドブックに規格化された。これが解体  
されつくした中国医学の廃虚である。そこに風土に根ざした  
実験を標榜する日本の医学が成立した(蘭学を受容もその線上  
にある—これは筆者の意見)。

この意味において『医心方』は日本医学、広く日本の学問  
にとつても、その出発点に立つてはやくも遙かな未来の進路  
を懐胎している予告の書である。

このような山田教授の論説を念頭において個々の論文をお  
読み下さることをお願いする。

(杉立 義一)

〔思文閣出版・京都市左京区田中関町二一七、☎〇七五—七五

一一七八一、一九九七年三月発行、A5判、六四〇頁、

一一、〇〇〇円〕

杉山 章子 著

### 『占領期の医療改革』

戦後史、とくに現代の医学・医療について考えるとき、戦  
後の占領軍の医療・福祉政策を無視して語ることはできない。  
それで、この点について、これまでさまざまな観点から言及  
されてきたが、残念ながら体系的に、きちんとした資料を使  
った著作はなかった。本書はこの時期の医療改革をできるだ  
け実証的に把握し、占領軍による医療改革を評価しようとし  
た意欲作である。占領軍の文書であるGHQ/SCAP文書

を中心に、日本や世界の政治、経済、社会の状況を視野に入  
れながら、関連資料を交えて占領期の医療改革の実体を叙述  
している。

本書は五章からなるが、特色は医療改革にだけ視点を絞つ  
ているのではなく、米国の占領政策そのものについて概観し、  
複眼的に把握しようとした点である。それで序章が「戦後史  
の原点」、第一章が「占領軍と占領政策」、第二章が「占領期  
の医療政策」、第三章が「占領期医療改革の展開」、終章が「占  
領政策の評価」からなっている。とかく医療史専門の書物は、  
医療史にだけ話題が限定されがちであるが、著者が都立大の  
大学院時代に占領史の研究に携わっていたことから、このよ  
うな構成ができたのであろう。この分野を語るのいうってつ  
けの人物である。

現代史の難しさは、その時代が自分史と重なる人がいるか  
らであるが、本書でまず現代史研究の注意すべき点を論じ、  
慎重に研究が進められたことを示している。

本書では、米国では占領政策への対策が日本が有利な戦い  
を進めていると信じていたときにすでに始まっていたことを  
明らかにして、政策が実施される過程、政策の性格、それが  
戦後の医療改革に及ぼした影響に言及している。

実施に当たって絶大な権力を持ったGHQのサムスについ  
ては自伝『DDT革命』で広く知られているが、サムスと日  
本側の目立った人物の協力や葛藤などにふれて、サムスの一  
方的な見方に留意している。とかく、占領者は自分の功績を

宣伝するために事実がゆがめられるが、それを自伝だといっ  
て鵜呑みにして歴史を語ることがある。また、日本側は過小  
評価している点もある。立場が違えば、見方も変わり、評価  
が分かれる点である。またよほど慎重にしなければ、後で評  
価が変わる点でもある。しかし、とかく噂に流れやすい点で  
あり、ここを明らかにしなければ、本当の評価ができない。  
本書では両者に等距離にあつて、文書や書物の資料を使つて  
よく調べて、問題点をあきらかにしている。

占領政策の影響を受けて、戦後がらりと変わったものを思  
いつくままあげても、厚生省の組織改革、公衆衛生の重用、  
病院管理組織の変化、医療者とくに看護婦の教育、職務の変  
化、医学教育の統一化、社会保障の変化と数え上げることが  
できる。それがどのような占領政策のもとで行われたか、あ  
るいは計画通りに成果が上がったのか、本書を読んでいて興  
味が尽きなかった点であつた。無論、すべてが満足できるも  
のばかりではなかつたが、さらに議論を重ねていく芽がここ  
に吹き出たことが重要なのである。将来を期待できる研究者  
であり、本書はこの分野の研究者にとって入門書として薦め  
られる本である。

なお、本書は第八回矢数賞の受賞作品である。

(酒井 シツ)

(勤草書房…東京都文京区後楽二二二一五、☎〇三三三八一

四一六八六一、一九九五年五月発行、A5判、二八〇頁、

三、二〇〇円)